

## 元末文人に関する一試論

要 木 純 一

元代、モンゴル民族の統治下において、漢民族の文芸上に新たな潮流が起こり始めた。中国北方では、雜劇が異様な程の盛行を見た。十三世紀になってその影響は江南に及んだ。雜劇という新しいジャンルは、その後衰退するが、伝統的な詩文の世界においても、宋詩の旧套を脱して清新な息吹が見え始める。当初は、政治の中心地大都を舞台としていわゆる元の四大家が活躍するが、やがて南宋の故地である江南地域に俊秀があらわれ始める。楊維禎を代表として、吉川幸次郎氏の言葉を借りれば、「市民の詩」が、従来の専門家の詩に代わっておこり、次代の明代の文学思潮につながっていった。(吉川幸次郎氏『元明詩概説』)

これら新たな潮流を担った人々が、例えば宋代、また次の明代と比べて、意外に少人数であることに、後世の我々は驚く。互いに顔見知りの、友人または師弟の關係で結ばれた小さなグループが、次第に、文壇は勿論、政治の世界においても実権を握ってゆき、他を圧倒して、後世に名を残していく——そのように見えるのである。元代前期においては、中原地域の元好問らを中心とするグループが詩文のみならず雜劇の世界でも中核になったように思われるし、後期においては、元の四大家の過半もそうなのであるが、江南出身者が、楊維禎や高啓、宋濂といった人達のまわりで活動をしているように見える。ただ、それは後世からそのように見えるのであって、実際は、あまたの群小詩人が、競いあつて、新たな時代を切り開こうとしていたにちがいない。そのことは、元人自身が撰んだアンソロジーに無名作家が多く収められていることからわかる。例えば、詩の結社「月泉吟社」が「春日田園雜興」を題として、詩作の

コンクールを行った結果が残っているが、当選者二百八十名の名前は、一部を除いて他の史料に見られないものである。

このように、ごく少数の超一流の文人は、決して彼らだけで存在しているのではなく、その背後に多数の有名、無名の知識人がひかえているのであり、能うかぎりその全体を視野におさめることが文学史研究の理想といえよう。

本稿では、元末の文壇の立役者であった、楊維禎の騏尾に付する格好で後世に名を残したと、恐らく言つてよいであらう、顧徳輝という人物が、いかに、元末文壇の思潮の影響を受けたか、また逆に、いかに、楊維禎の有力なパトロンとして、元末の文壇に参加していったかを論ずることによって、元末の文人のありようの一端に触れてみたい。

顧徳輝（一三一〇～一三六九）の伝記を考証するのが本稿の目的ではないので、清の顧嗣立の輯した「元詩選」所載の伝記を引くことよつて、彼の事蹟を簡単に紹介する。

「（顧）瑛、一名は阿瑛、別名は徳輝。字は仲瑛。」瑛の名で文献によくあらわれる。「崑山の人なり。」崑山は、楊維禎の隠居した松江の近くである。「世よ界溪の上に居す。」別の資料によれば宋以来の名家で、富裕な家であった。「財を軽んじ、客を結ぶ。年三十にして、節を折りて読書す。古書・名画、三代以来の彝鼎を購ひ、秘玩集録し、鑑賞すること虚日無し。」骨董のコレクターであった。科挙を受験して「茂才に挙げらる。会稽教諭に置せられ、行省属官に辟かるるも、皆就かず。」官職にはつかなかった。「年四十にして、家産を以て其の子元臣に付し、玉山草堂を卜築す。」隠居して家財を子に譲り、玉山草堂なる大別荘を営んだ。その玉山草堂は、「園池・亭榭・饌館・声伎の盛んなるは、天下に甲たり。」このころから文人達のパトロンとして活躍し始める。「四方の名士の、張仲挙、楊廉夫（維禎のこと）、柯九思、李孝先、鄭明德、倪元鎮の若きもの、方外の、張伯雨、于彦成、琦元瑛の輩の若きは、常に其の家に主となり、日夜酒を置いて詩を賦す。二妓の、小璠花、南枝秀と曰う者有り、宴会に遇う毎に、輒ち命じて觴を侑めしむ。一時の風流文雅は、東南に著称せらる。」東南すなわち江南地帯に名を高くした。元末の混乱が始まる。「淮張、呉に拠る。」淮張とは張士誠のことである。「嘉興の合溪に隠る。母の喪にして綽溪に帰る。張氏

再び之を辟く。断髪して墓に廬りし、釈典を繙閲す。自ら金粟道人と称す。」ここまでは、うまく身を処したのであるが、元明革命において、息子の元臣が元の役人であったのに連座して、臨濠に強制移住させられ、やがて没した。「至正の末、元臣、水軍副都万户恩封武略將軍水軍千戸飛騎尉錢唐鼎男と爲る。洪武元年、元臣の元の故官爲るを以て、例として臨濠に徙る。二年三月卒す。」淡泊を旨とした彼には、次のような逸話があった。「自ら曠志を爲りて、其の子を戒しむらく、紵衣、桐帽、櫻鞵、布襪を以て纏裹して土に入れよ、と。嘗て自ら其の像に題して曰く、儒衣、僧帽、道人の鞵、天下の青山骨を埋む可し。若し向時の豪俠の興を説かば、五陵の鞍馬洛陽街にありと。」自著及び編著が残っている。「著す所に、玉山璞藁有り。一時の高人勝流の分題宴集の作を会粹して玉山名勝集と爲す。又其の篋笥の蔵する所を第して、都べて一集と爲し、草堂雅集と曰う。又、玉山餞別寄贈詩及び玉山紀遊詩有り。則ち汝陽の袁華の編する所なり。」

顧德輝は、大体以上のごとき人物であるが、まず彼の別荘であり、当時の江南文壇の最も中心的なサロンとなった、玉山草堂の文学史上の意義について考察を加えたい。

「元詩選」では、この顧德輝の伝記に続いて、李一初（李邴、元末明初の人）の玉山草堂に関する評価を引くので、ついでに引いておく。

「李一初曰く、玉山草堂は、良辰美景に、士友群集す。四方の能く文辞を爲る者は、凡そ蘇（州）に過ぎれば、必ず焉に之く。歡意は濃浹にして、興の至る所に随う。尊俎を羅べ、硯席を陳ぶ。列坐分題して、賓主を問つる無し。仙翁、釈子も亦た往々にして在り。長短雜体有らざる所靡し。」

要領よく、この玉山草堂の特徴を、その主人の顧德輝の人となりをしるのばせるように記述している。

すなわち、庭園自体の美しさが主目的ではなく、あくまでも当初から文学サロンとして草堂を設けることに彼の主意があった。そして、自由で気前がよかった。主人と客の区別無く詩作を楽しみ、道士や僧など方外の士もやって来た。最後の一句は、直接には、生み出された文学作品の多いことを示すであろうが、それらが伝統的な詩文（長は古

詩、短は律詩、絶句のことであろうか。)のジャンルのみならず、雑体——恐らくは詞曲のごとき俗とされた韻文——のものもあつたであろうことも読みとれよう。楊維禎が、詞を一首も残さぬのに対して、顧徳輝は数首ながらも残している。

和漢、洋の東西を問わず、このような自由な文学サロンと気前のよいパトロンの存在は、文学の発展に大いに寄与するのであるが、もう少しこの玉山草堂の建設にこめられた顧徳輝の意図を探ってみよう。

汝陽の袁華の「金粟道人顧君募詩銘」(「強斎集」所収)によると、先に引いた伝記のこの草堂に関する部分について、やや詳しい記述がある。

「(顧徳輝は)年四十を踰えて、田業悉く子壻に付す。旧第の西偏に石を壘ねて小山と為す。左右の亭館若干所。傍らに雑花木を植えて、梧竹を以て相映帶せしむ。綵じて之に名づけて玉山佳処と為す。詩に玉山倡和等有り。集は世に行わる。」

では、どのような意図があつて、顧徳輝は草堂の建設に乗り出したか。

鄭元祐の撰する所の「玉山草堂記」に含蓄に富む説明がなされているので、今煩をいとわずに全文を引く。(「僑呉録」所収)

「昔王摩詰は莊を輞川に置く。藍田、玉山の勝有り。其の竹里館は、編茅覆瓦相参じて以て室と為す。是に於いて、杜少陵之が為に詩を賦し、玉山草堂と曰う者有り。景は既に偏えに勝れ、詩は尤も絶倫なり。後六百余年、呉人顧仲瑛氏、界溪に家す。溪は崑山に瀕す。仲瑛は詩を為るに工みにして、心に窃かに二子を慕う也。亦た其の堂廡の西に於いて、茅茨瓦を雑えて屋を為すこと若干楹。少陵の詩語を用いて一扁して、玉山草堂と曰う。其の幽閑佳勝、簪を繚ること四周。尽く梅と竹とを植う。珍奇の山石、瓌異の花卉も亦た旁羅す。而して列堂の上に壺漿して以て娛しみと為し觴詠して以て樂しみと為す。蓋し虚日無し焉。客に其の家に過ぎる有れば、喜んで草堂に即きて以て休み偃す。」

これによってわかるように、「玉山草堂」の命名は、杜甫と王維に対する敬慕に発し、杜甫の詩の中の語を用いたのである。ここに、我々は、元末の文人の尚古趣味——特に唐詩に対する——を読みとることが出来るが、ことはそう

簡單ではない。鄭元祐は続ける。

「(顧) 仲瑛は之が記を為すを乞う。客乃ち之が為に言いて曰く、夫れ物の有初を責むるは、其の來たるや尚し矣。邃古の時に在りて所謂標枝にして野鹿(のごとし)。之を久しうして始めて以て前に韋するを知る。夫の上衣下裳の日に及びて亦た何ぞ方尺の韋以て膝の上を蔽うを取らんや。然れども、是くの若くせざれば、以て之を法服と謂うに足らず。其の初めを忘れざる者を示す、其の意見る可し。窃かに意うに、上棟下宇の始まる也、其の草以て室を為すが若きは、当に必ず陶瓦の先に在るべし。今にして瓦を覆うは、茅よりも利なること百倍也。其の索綯して以て屋に乘る者は、貧しき者已むを得ざる也。仲瑛瓦を覆いて室するが若き者は數百楹に亘る。櫛比して鱗次すること波水の若く然り。然れども猶此の草堂を構うる者は、豈に但に少陵、摩詰を追慕するのみならん乎。蓋し亦た古人其の初めを忘れざるの謂い也。仲瑛詩を嗜むこと飢渴するが如し。古初に冥心する毎に、詩を草堂の下に哦す。既に以て篇什を成す。又綵絵して以て之が図を為す。今復た客に命じて之が記を為さしむ焉。其の草堂に於いて拳拳たること此くの若し、勢いとして且に浣花溪、輞川莊と同じく、名を久遠に擅いままにせん。豈に特だに其の初めを忘れざるの謂いのみならん哉。客なる者は遂昌山樵、鄭元祐なり。其の之が記を為すは、則ち至正九年秋九月一日なりと云う。」

顧德輝への賞讃を強調するため複雑なレトリックを用いているので論理がわかりにくいが、私見によれば鄭元祐は顧德輝の草堂を作った氣持を次の如く忖度する。

ただ杜甫や王維を慕うだけではない。富裕でありながらかような草ぶきのあばらやをたてたのは、杜甫や王維等よりもずっと前の太古の家のありようを忘れぬがためである。そしてこの草堂は、王維の別荘が後世に名を残したごとく、未來永劫に名を残すであろうと。

元詩は、唐詩への回帰、復古を志向するものだといわれるが、ここに見える志向は、回帰や復古の話だけでは表わせないものがあると思う。それを太古(其の初めを忘れず)から未來(名を久遠に擅いままにす)への時間の流れの中に自らを位置づけようとする志向、歴史秩序への志向という風に筆者は表現したい。單純に古人に帰るといふのではなく、古人がもっていたと想定される時間秩序の感覺へ帰るといふことを、顧德輝や鄭元祐は考えていたのではないか。

これは、楊維禎が、一方で秩序破壊者の如き生活態度を持ちながら、他方、春秋学者として歴史の正統性を追求し、一見、自由奔放に見えるその作品も、実は過去に模範があるというように、極めて接近した考え方である。

楊維禎の「玉山草堂雅集の序」（「東維子集」）も、同様の観点で読むことができよう。「崑山の顧仲瑛、其の嘗て与に遊ぶ所の者の往還、唱和及び雜賦の詩を哀めて、悉く諸を梓に録り、編帙既に成る。余に一言を求めて以て諸首に引たらしむ。余呉に來りて見るに、呉の大家の家、人に友する者、往々市道なる耳。勢要なる耳。声色貨利なる耳。声利を好まずして雜流を好む者は寡し矣。知んや儒流を好まずして、書教を好む者は寡し矣。知んや文墨章句を好みて不朽の事と為すをや。」

「不朽の事」という語が現われるのは偶然ではあるまい。市道、勢要、声色貨利などの目先の現実を追うのではなく、またそれらよりは高度であろうがやはりあくまでも現実世界の中だけの秩序を目指しがちな儒流を好むにとどまるのではなく、現実を超越した歴史秩序——過去から未来へと永遠に続く、「不朽の大事」たる文章に心をくだく人が少ないなかで顧君だけは違ふと楊維禎はいうのである。

「顧」仲瑛は嗜好既に彼に異なる。故に其の友を取るも亦た異なる。其の内交を余に首とするや、亭を築きては、其の亭は以て余の学ぶ所を尊ぶ也と曰い、榻を設けては、其の榻は以て余の止まる所を殊にする也と曰う。」

顧が榻を特別待遇で大切にしてくれることを述べているが、筆者は更に踏み込んで、永遠の歴史秩序の権化たる顧が、榻を聖別してその秩序の中に位置づけてくれることに對する大きな感激をあらわしているのだと考えたい。だから、「余何をか修めて此を得る哉」という強いいぶかりが続く。「蓋し仲瑛の義を慕いて賢を好むこと、將に以て始めを余に示さんとす。始めを余に示して、而して海内の士、余より賢なる者有りて至らん矣。故に其の友を取ること日に益す衆く、文墨の聚まる所を計るに日に益す多からん。此、草堂雅集の家より出でて外に布く也。余より次して凡そ五十余家、詩凡そ七百余首を集む。其の工拙淺深は自ら定品有り。觀る者、余の評裁を待たざること有る也。其れ或いは、短を護り愚に憑り、持して多きを以て人を上がん者あらんか、仲瑛自家ら権度し、又輒く能く是非して、之を取せん。此の次、其れ觀る可き者有らん。」このあたりは、読みづらいが、歴史秩序を身につけた顧のもとに集まる

作品は、文壇の第一人者たる楊の力をまつまでもなく、自ずから取捨選択せられ、秩序づけられるであろうことを期待し確信するのであろう。それゆえ、「之を攬る者は、其の人の貴賤雅俗及び老釈の門を異にするを論ずる無く」うわべの違ひに關係なく、それらの作品は、「其の条貫を綜べること、金石の相宣べ、塩梅の相濟すが若き也。」微妙な秩序によつて、全体に条理が通されるであろう。もはや作者達の世間的なうわべの違ひは問題ではない。それどころか、顧の編む「草堂雅集」によつて逆に作者達の価値が決定されるであろう。「蓋し必ず雅集に得る者有るべし。雅集に得れば、則ち亦た其の人と為りを得る者有らん焉。仲瑛讀書の室は、玉山草堂と曰う。故に集は之を以て名づく。其の自著に玉山璞稿、玉山樂府有り、時に行わると云う。至正九年夏五月十有二日。」

これらの文章は、顧德輝をほめたたえるのが、半ばの目的であるから、勿論、彼の實力について割り引いて考える必要があるであろう。しかし、彼に期待される役割が、単に場所と資金の提供者になることにとどまるのではなく、目ききとして文壇を秩序づけることにあつたことは認めてよいであろう。名家の出で、茂才に挙げられた彼には、その資格が十分にあつたと考えられる。

それでは、顧德輝自身はいかなる意識をもつていたか。相当な使命感を、やはり彼なりにもつていたようである。文学のサロンとしての玉山草堂及び周囲の庭園に、当然多額の資金をつぎこんだのみならず、楊維禎ら一流文人の意見を聞きながら、さまざまに意を用いたらしい。「玉山草堂」という命名の裏にある意図については既に述べた。

彼の、現存する数少ない散文に「拜石壇記」なるものがある。「拜石壇」は、彼の別荘の名勝の一つである。  
(「玉山璞稿」所収)

「瑛は素より米顛の癖有り。奇峰怪石を見れば、輒ち徘徊顧恋して、舍て去るに忍びず、或いは百計もて之を求む。得ざる者は、必ず其の形似を図写して、諸を草堂壁間に標して以て風格と為して後に供す。至元戊寅四月下澣、老僧巖叟を東城の菴に訪ぬ、菴は即ち故の宋の周太尉の宅なり。断垣の外、燕麦の中に、假山の在る有り焉。遂に榛を披して棘を約し、衣を褰けて登る。其の上に諸峯羅立するも、已に好事者の為に挽載せられて去る。独り一石の壁に似る有り。其の左股を失う。高梧の下に欽臥す。上に老坡題觴詠の語有り。之を易えて帰り、諸を中庭に立つ。石の

挺挺拔拔たる、老坡の山林丘壑の間に立つが如し。愈よ其の孤標雅致を見る也。瑛之に拂拭を加え、永く子孫の宝玩と爲す。明年奎章閣鑿書博士丹丘柯敬仲下訪し、見て之を奇とす。再拝して名を題して去る。丹丘は辞翰鑿博、有元の元章也。是に於て、石を砌りて壇と爲し、字して拜石と曰う。後三月にして御史白野達兼善來觀す。柯の逸を嘉して、爲に古篆の拜石二字を壇に作る。又、寒翠を隸して以て其の所を美む。石の名是由り愈よ重し。然れども皆未だ紀する所の詳を知らず。至正乙未冬周履道、梁鴻山自り老坡手帖を携贈す。之を讀むに乃ち是れ忠玉提刑の快哉亭飲移に答うる者なり、上に貫秋壑の私印有り。其の辭は、紀石と甚だ肖る。嘗て記す。大全集中に、王忠玉虎丘に遊ぶの詩に次する有り、王忠玉諸公と西湖に遊ぶ次韻詩有り。劉景文、馬忠玉に答うる詩に次する有り。蓋し、當時、兩りの忠玉有り焉。然れども、孰れか是なるを知らず。宋史を考するに及び、元祐四年、坡は翰林學士兼知礼部爲り。事を論ずるを以て、当軸者の恨みを積む。故に外に學士龍圖閣知杭州を拝して以て朝諤を避くる也。瑛想うらく、老坡は風流曠邁、千里の間を行くに、名山勝水有れば、豈に友朋と酒に酔い詩を賦し以て其の意を快とせざらん。又諸雜録を考するに忠玉は乃ち王規父の姪孫。先に坡は維揚に在り。後に坡は江を渡る。坡は其の詩に答うるに、君の未だ江を渡らざるに及び、我が勤めて燭を乗るに過ぐの句有り。是則ち、書の記する所の者は王忠玉たること疑い無し矣。然る後に石は維揚の故物にして帖は王忠玉の家宝なるを知る也。呼、石の山に在るや其の幾千万年なるかを知らず。坡の題するに因りて鑿して山より出づる者、又其の幾百年なるかを知らず。帖の寿は、又石の比に非ず。兵残い火燬き、人手に流落する者亦た其の幾百年なるかを知らず。今一日一二美併せ來たる。抑も、神物の会合する所有る耶。吾れ玉山際遇する所有る耶。又思ふ、丹丘、白野二十年ならずして仙去す。坡仙、靈有らば豈に風清く月白きの夜、二公を挟みて同に此の壇に逍遙する能わざらん乎。瑛も亦た豈に、古玩を摘みて、一樽を此の壇に酌する能わざらん乎。此の石に因らざれば、其れ能く永く伝えん。敬んで此の記を書き、伯盛朱茂才をして他石に刊せしめ、後の覽る者をして石と帖と並びに拜石の壇、自りて來たる所有るを知らしむ。至正丙申正月五日金粟道人顧瑛 玉山草堂に書す。」

この記にも、単に懷古趣味のことばではかたづけられない価値感覚が見うけられる。目の前の拜石壇を、歴史の中



いかに正確に位置づけようかという強固な意志が感じられる。蘇東坡の手跡であること、詩で答えた相手が王忠玉であることを考証するくだりは、碑文全体のバランスをくずしかねない程に、執拗、綿密である。そして、さまざまな人がこの拜石壇に関わつて来たことを示して、歴史的な重みを増そうとしている。特に、元朝廷の奎章閣で、宮中秘蔵の法帖の整理、鑑定にたずさわつた書の権威柯九思のこの石に対する感嘆（決して鑑定ではない）は決定的な役割を果たす。更に、石が何千万年も山中に埋まっていたであろうことに、やや突飛な形で言及し、悠久な時間の流れの中で、事物の変転に思いをはせ、この記を書くことによつて後世の人に石の由来を知らしめんことを書いて未来へも思考はむかう。また、蘇東坡の赤壁の賦を想起して、今は亡き柯九思らと蘇東坡が、この拜石壇に遊びに来ることをねがつて、更に重層的に歴史が堆積する。

わずらわしいといつてもよいような歴史へのこだわりといえよう。筆者は、中国の書画において、題記が篇幅の半ば以上を犯し、書や画本体の美を損わんばかりであるあまたの例があるのを見て、異様な感じを禁じえない。思うに、それは、書画をわが物にしようという所有欲によるというよりも、この歴史に対する中国知識人の異様な病的なこだわりがからしめるのではないか。そしてこのような傾向は、元末以降に顕著になつていくように筆者は考えている。以上のようなことから、この「玉山草堂」の空間の細部にいたるまで、顧徳輝の綿密な心づかいがこめられていたであろうことが推測される。規模の大きさや豪華な気前のよさのみが文人達を引きつけたのではなく、この細かな歴史感覚が当時の時流に乗つたのではないかと筆者は思う。

もちろん、このことは、「玉山草堂」で生まれる詩作が、全て重層的な歴史感覚を詠んでいるということではない。玉山の名勝を多くの文人が詠つたのを編集した「玉山名勝集」には、歴史を詠つたものは少なくむしろ淡泊な叙景詩が多い。筆者がいたいのは、文学作品に対する目に見える貢献ではなくて、文学作品が生まれやすいような環境、ムード作りに顧徳輝が心をくだいたのではないかということである。

陳基の「夷白齋稿外集」所収の「玉山草堂分韻書序」に見える顧徳輝のエピソードを引こう。

「予（陳基）は玉山隱君と別ること四三年。聞くならく、其の会稽の楊鉄崖、遂昌の鄭有道、匡廬の于鍊師、若溪

の剡九成、呉僧の琦元璞と日び詩酒の娯び有りと。而して其の更唱迭和の篇什に見わる者往々世に伝頌せらる。而るに、予は汗漫の役を以て、河洛を溯り、嵩岳に上り、関陝を歴て、北遊して京師に客となり、居庸を度る。其の跋涉する所を計るに畜に万余里なるのみならず。挈挈焉として寒暑に觸れ、霜露を犯すの違まあらざるに方り、又何に由りてか、杯酒を持ち、翰墨を濡らし、詠歌揮酒して、以て諸を君子の列に廁かんや。今年孟春、予北方自り還る。隠君首となりて書を以て招かる。草堂に過ぎりて旬日の留を為す。時に于いて、鉄厓は去りて春秋を松江泖沢の上に講ず。有道は呉城天宮里に隠居す。元璞も亦た天平の龍門に帰り、而して九成は則ち漕臺に出入して、文檣を執りて以て公家の務を理む。朝夕、予と侶と為る者は、主は則ち隠君、客は則ち鍊師也。予窃かに念ずらく、三教年来、馳驅辛苦し、幸いにして来たり帰る。而して隠君能く水竹琴書を以て相慰藉す。而して諸君子なる者は乃ち出処齊しからず、復たと疇昔雅集の盛んなるが如くならず、俛仰寤嘆するに方りて慨然として懷いを興す。而して豫章の熊松雪、婁江の陸良貴、適ま隠君に至る。乃ち綺席を列べ、芳俎を設くること、碧梧翠竹の間に于いてす。相与に投壺、雅歌し、酒を飲みて懽ぶこと甚し。且つ席に即きて詩を賦す。碧梧棲老鳳凰枝を以て韻と為す。予探りて老の字を得たり。餘は則ち各の属する所有り。詩皆成る。独り松雲子飲むこと酣わにして長嘯して上馬馳せ去る。棲の字を分かち得たるも賦せずと云う。」

長い間音信不通であつた友が帰郷したのに対して、どこからかその情報を得て招待状を出す細かな気配りがうかがわれる。そして杜甫の秋興八首の一句を分韻して詩を賦すわけであるが、その句にあらわれる碧梧の間で正に宴会を開くというムードの作り方、(逆に碧梧の間で宴会を開いたので、この句を選んだかも知れぬがいずれにせよ) サロンの主としてのホスピタリティーを十分に発揮しているといえよう。

このように出来あがる詩そのものは即席のつまらぬものであつたかもしれぬが、文学的雰囲気を作る企らみには巧みであつた人のように思われる。

濃密な歴史感覚とホスピタリティーは、新たな(復古のようであるが実は新たな)文学ジャンルを生み出した。それは日本の連歌にあたる聯句という形式である。無論、韓愈の「石鼎聯句」の故事にならつたのであるが、韓愈のが

偶然に出来あがったもので追隨者があまりあらわれなかったのに対して、玉山草堂でのものは、いかにもサロンの猥雑な雰囲気にならわしいものであった。

はじめはやはり偶然にはじまったものらしく（「玉山璞稿」所収、「可詩齋夜集聯句及びその序」）韓愈に倣ったまじめなものであったが、次のごとく七言のやわらかいものも作られるようになった。（「玉山璞稿」所収）

「書画舫聯句」

三月三日、楊鉄崖と書画舫に飲む。侍姫素雲椰子酒を行らす。遂に聯句を成すこと左の如し。

龍門の上客驄馬を下り（瑛）洛浦の佳人水簾に上る。瑤瑤瓶中椰蜜酒（維楨）……」

ホスピタリティーにおいて当時重要であったろうことはこの詩の序にいうごとく妓女を待らすことであり、大いに文学に影響を与えたであろう。楊維楨のいくつかの好色な作品には、このような背景があると思われるが、この詩の序の如き明文は少ないので実態はわかりにくい。

聯句はあるいは楊維楨らの力で更に発展したかも知れないが、残念ながら元末の大混乱で立ち消えになった。

歴史感覚が強いサロンの主催者としての顧徳輝について述べてきた。歴史に敏感であるということは、歴史の主流が現在どこにあつて、将来どの流れが残るかということに興味を持つということである。それはより正確な面白い情報を手し、更にその情報を他人にもわけあたえる、現代ではジャーナリストとよばれる人々と性格が似ていると筆者は考へる。顧徳輝のごとき人々が、文芸の流行にコミットし、それを上げるのに深く関与したであろうことを次に述べる。

そのことがもつとも明白にわかるのは、彼が出版の篤志家であつたことである。「玉山名勝集」や「草堂雅集」等で、彼のサロンの参加者の作品のアンソロジーを続々と出版したのは、彼が元末の文学史に対して果した大きな貢献である。ただここでは、そのようなあからさまな行動でなく、先の聯句のように新しい気運に素早くコミットする面を論じたい。

楊維禎のおこした新たな文学運動に彼はすぐに追隨した。楊維禎は当時の青年に多大な影響を与えた。例えば、鉄崖体と呼ばれる楽府は一時に流行したという。しかし、それよりもっと多くの追隨者を生んだのは、彼が創始したといつてよい、「西湖竹枝詞」という詩体である。古楽府よりも簡便であるので、広い地域に、後々の時代まで影響が持続した。

どのようなものであるか、その序をひこう。（「東維子集」所収）

「予、西湖に閑居する者七八年。茅山外史張貞居、苕溪鄭九成の輩と唱和を為す。水光、山色を交え、胸次に浸沈せしめ、一時の尊俎粉黛の習を洗う。是に于いてか竹枝の声有り。事を好む者、南北に流布せしむ。名人韻士の属和する者、無慮百家。道に諷諭を揚ぐ。古人の教えは広し。是の風一たび變じて、賢妃貞婦、国を興し家を顕し、而して列女伝せき作れり。風謡を采る者、其れ諸を忽おぼせにす可けんや。至正八年秋七月。会稽楊維禎 玉山草堂に書す。」

この序は恐らく西湖竹枝詞のアンソロジー（現在のものは後世の輯本）が編まれた時に書かれたものであろう。玉山草堂で書かれたことに注意してほしい。あきらかに、顧德輝のすすめによつたのであろう。

この竹枝詞は、唐の劉禹錫が当時の民歌を洗練して創始したものに学んだもので、天下第一の景勝地・西湖を題材としたものである。そして、同字のくり返しを好み、平仄もルーズである。

ところで楊維禎はこの詩体をなぜ創始したのであろう。自由な短詩型文学を發展させたい芸術的動機もあつたであろうが、人口に膾炙しやすく唱和しやすいた特色を生かして、多くの人々との交遊の材料となつたからではないか。すなわち自分だけが独占する文学ではなくて、広く世界に開かれた文学を目指したのだと筆者は考へる。

楊維禎の西湖竹枝詞の第一首がそのことを暗示する。

「蘇小の門前花株に満ち、蘇公の堤上女壚に当たる。南官北使須べからく此に到るべし。江南の西湖は天下に無し。」南官北使があつまる西湖。人々の交流の激しさは過去の幾倍にもなつた。その社会の変化にあつた簡便な詩形が必要とされるであらうことを楊維禎は見抜いたのだと思う。

顧德輝も早速唱和し、二首が現存する。彼の息子達四人も作品を残している。（「西湖竹枝詞」）

ところで筆者は、この「西湖竹枝詞」の盛行は更にその少し前の「宮詞」の流行につながっていると考える。楊維禎作の「宮詞」の序に次のようにいう。

「宮詞は詩家の大香奩也。村学究の語を許さず。本朝の宮詞を為る者は多し。或いは典故を用いるに拘わり、又或いは国語を用いるに拘わる。皆詩体を損す。天曆間、予の同年の薩天錫、善く宮詞を為る。且つ予に什を和するを索む。通じて和すること二十章。今十二章を存す。」

元朝の大都の宮廷は、当然詩人として詠むべき題材であつた。これも七言絶句の簡便な詩形で題材が清新であつたから、大いに流行した。楊維禎はこだわりなく新しい題材を歌う。

「雞人曉を報じ五門開く。齒簿の千官虎台に泊まる。天上鵝に駕す、先ず信有り。九重鸞駕上都より回る」  
「開国の遺音、樂府伝わる。白翎飛び上る十三絃。大金の優諫関卿在り。伊尹扶湯劇編を進む。」

上都や、元雜劇を大胆に題材としている。

そして顧德輝も、同調するように宮詞を作っている。但し、天寶宮詞と題して、唐代の宮廷を舞台としているが、「寓感」という副題から見れば、恐らく当時の宮廷を風刺しているらしい。

このように、楊維禎の詩作に敏感に反応するさまが顧德輝には見られる。現代の見方ではエピソードとして排せられるかも知れないが、かくのごとく敏感に新氣運をキャッチして模倣をする多数がひかえていることは文学の発展にとって不可欠のものであつたと筆者は考へる。特に元以後は、多数の受容層あつて成立する文学が中心になつてきたのである。

「玉山草堂」は歴史の主流に位置することを使命にするとともに、地域の情報の集散地になることをめざした。元末の混乱で、顧德輝も草堂も消滅してしまつたが、このような存在をなくしては、超一流の楊維禎の文学の盛行もありえなかつたであらう。

「元詩選」における顧德輝の伝記のおわりに、「元詩選」の選者顧嗣立自身が、玉山草堂の遺址をたずねた記事が載っている。

「王申の秋、余 犀月と共に大臨を尋ぬ。界溪に于いて綽墩に上るを得たり。玉山遺址を尋ぬ。山色の湖光を望むに、  
細かに当年の草堂の文酒の会を想う。真に吾が家の千載の一佳話也。」